

# レジャヨ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討

伊 東 久 実

## はじめに

保育実践における記録の重要性が、長く語られている。わが国においては保育問題研究会が本格的に保育実践における記録の重要性に着目し、長期に渡り研究対象としてきた（伊東、2000）。海外に目を向けると、世界的に著名な北イタリアのレジャヨ・エミリア市の幼児教育は、保育実践を成立させる主要な要素としてドキュメンテーションを位置づけている（リナルディ、2001）。

ドキュメンテーションとはレジャヨ型プロジェクト活動の実践記録であり、子どもたちの活動の様子を撮った写真、活動中の会話記録、子どもたちが制作した作品、保育者による子どもたちの活動の説明などから構成される。このドキュメンテーションは教室や廊下の掲示板に展示され、子ども、保育者、そして親たちにプロジェクト活動での子どもたちの学びの経過を伝える。

木下（2000）は、ドキュメンテーションの役割を、1）子どもたちにとって、2）保育者にとって、3）親や地域住民にとっての三者から検討し、レジャヨの保育実践における記録の重要性を示している。

第一に、子どもたちにとっての重要性は、以下の3点に集約される。

- ①自分がつくり出した作品は言うに及ばず、そのプロセスで自分が出した考えや発言に保育者たちが関心を寄せ尊重してくれていることの証となる。
- ②子どもたちが自分自身の学びの過程を見直す機会を提供したり、過去に自分

自身がやりかけていたこと、それをやろうと思っていたときの問題意識に立ち返って、そこから再出発するための大切な資料を提供する。

- ③ドキュメンテーションを利用することで、子どもたちの議論や長時間の話し合いが容易になる。

第二に、保育者にとっては、今後の指導のポイントを探り出すための重要な手掛かりとなる。第三に、親や地域住民にとっては、親や地域住民の保育参加を促す重要な通路となる。

以上に加え、木下（2000：193）は「ドキュメンテーションは、プロジェクトの基本的な構成要素である探求、表現、対話をかつてない水準に押し上げる働きをすると同時に、子どもたち、親たち、保育者たちの三者を相互に有機的に結びつけるシステムに組み込まれて、生きた相互交流のかなめとなっている」と記している。

さらにヘンドリック（2000：99）は、ドキュメンテーションの有用性について、「最終的に、子どもの遊びや探索の意味や価値を、親や訪問者に伝えるには、記録文書が効果的な方法である」と述べている。

このようにレッジョ・アプローチにおける記録の重要性が明らかにされている一方で、ドキュメンテーションの記録内容について検討を行った研究は乏しく、先行研究で重要であると主張されるドキュメンテーションは、実際にどのような観点で記述され、レイアウトされ、提示されるのかを知ることはできない。理論と実践を丁寧に結びつけることによって、私たちが模索し続ける保育実践の記録のとり方に具体的な示唆が得られるはずである。

本研究では、米国マサチューセッツ州ボストン市のレッジョ・アプローチを実践する保育施設におけるドキュメンテーションの詳細を示し、現地での視察とインタビューによってその内容と作成方法を検討することを目的とする。

## 1 ドキュメンテーションの作成方法

ピーボディテラス・チルドレンズセンターは、ハーバード大学提携のチャイルドケアセンターである。これは、1978年に設立されたハーバード大学の教職員の家族優先の保育所である。同センターでは、レッジョ・アプローチに基づき、ドキュメンテーションに力を入れている。そこにはアトリエと呼ばれる制作室が複数用意され、アトリエリスタ（造形美術の専門の教師）が常駐する。8クラス編成で、生後3か月から5歳までの子どもたちが、年齢ごとに分かれている。筆者は、そこへ2011年8月に訪問する機会を得た<sup>1)</sup>。

ドキュメンテーションは、アトリエリスタと保育者から構成される2～3人のグループによって作成される。彼らは、子どもたちの活動の様子を写真に撮り、活動中の会話を記録し、録音する。写真は「撮り続ける」と説明されたとおり、子どもの行動の全体像が理解できるほどの多くの枚数を撮り集める（写真1）。1週間に1回行われるウィークリーミーティングでは、保育者とアトリエリスタが撮り集めた写真を元に、子どもたちの活動の展開が適切であったかどうかを話し合う。

子どもたちが興味を示した事柄については、特に印象的な一枚の写真、ないしは子どもが過去に経験した活動を思い出させる数枚をピックアップし、活動の過程及びその時点で子ども自身がどう考えていたかを表した言葉を添えて、子どもたちが振り返れるように掲示する。掲示のしかたは、パネルにしたりボードにピンナップしたりと多様である（写真2.3）。写真が掲示されている間中、保育者たちは子どもたちの反応を見守りながら「この活動をもっと発展させることができるか」と考え続ける。子どもたちの関心が薄い場合は違う活動に転換することになる。

発展し続ける活動については、継続して活動の過程を表す写真を配置し、子どもたちが考える問題点とその解決に取り組む様子、それへの保育者の援助の

## レジヨ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討（伊東）

方針を書き加えて一枚のパネルを作成する。ドキュメンテーションとは、このように、保育者やアトリエリスタに注意深く厳選された活動の成果であることがわかる。

こうして作成されたドキュメンテーションは、活動に関係する子どものみならず、他の子どもたちや保育者、さらには親の目にも触れやすい教室や廊下の掲示板に展示される。保育者は、「親たちに対してドキュメンテーションを通じて感覚をコネクトしたい。ドキュメンテーションは他者との違いを知らせるものではなく、その子の発達を理解してもらうためにある。」と語る。保育者は、親がドキュメンテーションによって子どもの発達する様子に気づき、その後の活動のプロセスに関心を持つことで、保育実践への参加を期待する。それゆえ、ドキュメンテーションには親の記述も歓迎される。親は、家庭での子どもの活動の様子を写真に撮り、それにコメントを添えて記録を作成する。その

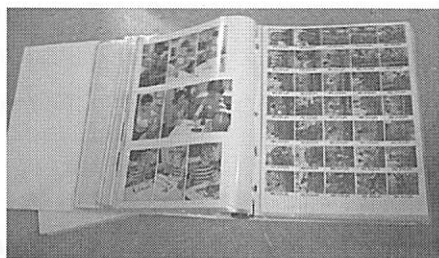


写真1

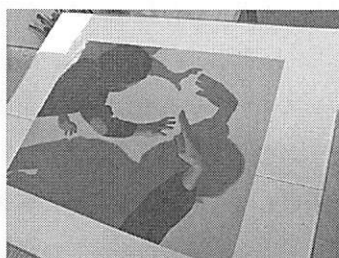


写真2



写真3

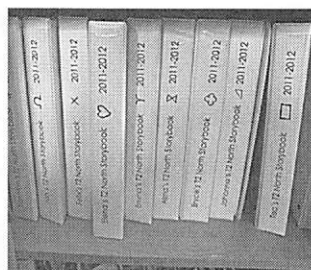


写真4

記録は保育園の個人用のドキュメンテーションと共にファイリングされる（写真4）。このファイルはいつでも子どもたちが自由に見ることができる場所に置かれている。

## 2. ドキュメンテーションの記述内容と分析

保育室内に掲示されているドキュメンテーションは写真5、6、7のようなレイアウトで、以下2.1から2.3はドキュメンテーションの抜粋である。



写真5

2. 1 「マグネットがいっぱい！」色・形・数に関する知識の構築

－フェリックスとエレナ 2011年8月17日水曜日－

エレナは来てすぐにライトテーブルの脇にいるフェリックスのもとに直行した。四角や三角などの異なる形を見ながら、エレナは「丸のかたちはないの？」と尋ねてきた。しかし、丸の形がないと知ると、彼女は自分で丸を作り始めたのだ。彼女が三角形をつなぎ合わせれば円を作れる、という直感を持っていたことに私は驚いた。

エレナ：私は丸を作ったよ。今度は丸を分解していくの。

フェリックス：僕は四角を集めてる。これってマグネットなんだ。マグネットがいっぱい！

エレナは、円を作るために組み合わせた三角形をひとつひとつ指さしながら言った。

エレナ：青、だいたい、緑、だいたい、だいたい、緑。

フェリックス：これとこれは同じ色だ。（だいたい色の三角形を2つ指し示しながら）

エレナ：数をかぞえたいの？

エレナは三角形を指さしながら、フェリックスは指折りしながら、2人で数を数え始めた。フェリックスはエレナが形を作るのに使うようにと、三角形を1つ手渡そうとした。

エレナ：それいらない！

フェリックス：そんなこと言うなよ！

ケンドラ：エレナがどれが欲しいか教えてくれるわよ。言ってくれなくちゃどれが欲しくてどれがいらないかわからないわよね。

フェリックスは大きな四角形を立てて（左上の写真のように）組み合わせると、「僕も丸を作ったよ！」と言った。エレナは「私はフェリックスのとは違う丸を作ったの」と言うと、工程をひとつひとつ説明しながら、再び円を作りだした。

エレナ：こうやって緑のとこれを組み合わせるの。そしたらだいたい色をつなげて、ここにもうひとつだいたい色をくっつけるの。

エレナは赤色の二等辺三角形に目をとめて、「この三角形って、ピザみたい」。フェリックスは笑ってひとつ手に取ると、「僕は青いピザを食べてるぞ！」と言った。エレナも彼にならった。フェリックスはエレナをじっと見つめて、「食べてるフリだよ、フリ。」と言った。フェリックスは「丸を作ってるんだ！」と言いながら、今度は二等辺三角形を集めていった。すぐに三角形がたりなくなってしまったので、私は箱から余りの三角形を取り出し、彼に渡してあげた。「ありがとう！」と言うとフェリックスは組み立て続けた。「青い三角がいっぱい！」と言ってそれらを裏返したり戻したりしていた。

このドキュメンテーションは、子どもたちの考えとそこに至る探求のプロセスを、子どもたちの発言を克明に記述することによって表現している記録である。まず、エレナの「円を獲得するために三角形をつなぎ合わせる」という直感的な思考を読み手は理解することができる。もし、記録がなかったらどうだろう。私たちや親はマグネットの積み木で遊んでいる子どもの遊びの意味や価値を知ることはできないはずである。子どもの傍らにいて、子どもたちの言葉や行動に敏感に目と耳を傾けて観察する保育者の記録があって、初めて気づくことができるのである。次に大きな四角形を立てて円を作ったフェリックスに対して、エレナが今度は直感ではなく思考した結果、円を作る彼女の工程

を「こうやって緑のとこれを組み合わせるの。そしたらだいたい色のをつなげて、ここのところにもうひとつだいたい色のをくっつけるの」と言葉にして説明する様子が記録されている。この記録によって彼女の思考の過程が明らかにされている。レジャョ・アプローチにおいて、子どもたちは自分のアイデアを表現する方法と問題解決法を考え出すように促される。「誰か他の人に説明できてこそ、初めてわかったといえる」（ヘンドリック、2000：31）という考えが大切にされていることもこの記録からわかる。

さらにフェリックスについても同様に、記録から彼の探求の過程を理解することができる。当初、同じ玩具を目の前にして、フェリックスの興味関心はエレーナとは異なっていた。積み木の形に関心を示すエレーナに対して、彼はマグネット自体や色に関心を寄せていた。彼は最初に円を作るために、写真に示されているように大きな四角形を垂直に立てて円を作った。見た目は五角柱に近い。ところが記録の最後には「丸を作っているんだ」と言うフェリックスの言葉が記録されている。フェリックスはエレーナの方法から影響を受けて、大きな四角ではなく二等辺三角形で円を作り始めた様子が明らかにされている。子どもたちがお互いの声に耳を傾け、お互いの考えを用い、自分と異なる意見を取り入れ、新しい学びを構築し始めているのだ。フェリックスに見るこのような学びのプロセスと意義に焦点を当てるためには、他者との交流の経過を描いた記録が不可欠である。つまり、このドキュメンテーションは、保育者の教授を受けて子どもがどこまで成果を上げたかを評価する記録ではない。子どもは、他者との関係性の中でどのように発達するかを描写する記録である。ここでは、保育者には、子どものありのままの姿を詳細に記録すること、その記録を綿密に分析することが求められている。

最後に、保育者の関わり方が記録されている。この保育者は指示を出す代わりに、フェリックスが円を作る際に不足していた三角形を瞬時に差し出している。レジャョ・アプローチにおいて、保育者たちは子どもに対する一つのイメー



ジを共有している。それは「子どもたちはすべての社会的交流にたずさわったり、つながりを確立したり、彼らの学びを構築したり、環境がもたらすすべてのことを処理することを準備し、また潜在能力があり、好奇心をもち、関心を寄せている」(ヘンドリック、2000:11) という子ども観である。このイメージの下に子どもが持つ能力を確信する保育者は、子どもの新たな経験の価値を知り、それに迅速かつ適確に対応する準備を常に心掛けていることが読み取れる。

## 2. 2 スカルプティング粘土の導入 (8月11日)



写真6

8月11日午前 グレイの彫刻粘土を見せる。

ジョアンナは木のスプーンが粘土を持ち上げたり、形を変えたりできることに興味を示した。粘土の小さなかけらを指で机に塗りつけると、スプーンでそれをたたいた。次にスプーンで粘土を少し切り取ると、それをスプーンの背で粘土のかたまりに強く押し付けた。すると今度はスプーンを手に取り、「a spoon」と名付けると、粘土の大きなかたまりをそのスプーンの上へのせ、机から持ち上げた。

ジャンも粘土に関心をもった。机の上に並べられたさまざまな道具を見渡しその中から木のヘラをためらいがちに選ぶと、粘土のかたまりを最初はべたべたと、次第に強くたたいて平らにつぶした。今度は別のトレイから粘土のかたまりを取ってきて自分のトレイに置いた。そして再びヘラを使い、さっきと全く同じように粘土をたたいてつぶした。

子どもたちがプラスティリナ<sup>2)</sup>や粘土を使って実にさまざまな遊び方をする様子を目にした。こうした素材とのかかわりは、アイスクリームを食べるごっこ遊びにもなるし、指や道具を使って感触を確かめる感覚的経験にもなる。色のイメージについて意見を交換し、共同作業をする機会にもなるのである。プラスティリナと粘土は、色、重さ、柔軟性、質感といった点で違いはあるが、この2つに共通する部分もあることを発見するのは興味深かった。他の道具を使ったらどうだろう？ 圧力をかけてみたらどうだろう？ 手やスプーンにのせてバランスをとってみたら？ テーブルにたたきつけたらどんな音がするんだろう？ 粘土やプラスティリナ自体をたたいたらどんな音になるだろう？ この粘土のかたまりはどうなるかな？

われわれ教師側にも同様に

—もし別の包装の、色の混ざり合っていないプラスティリナを用意したら、子どもたちはどう反応するだろうか。

—別の環境下ではプラスティリナや粘土を用いてどんな遊び方をするだろうか。例えば床に新聞紙を敷いてその上で遊ばせたらどうなるか。

—灰色ではなく、茶色い粘土や、スカルプティング粘土<sup>3)</sup>を与えたらどうか。さまざまな種類のスカルプティング粘土とモデリング粘土<sup>4)</sup>を用意したら、子どもたちはどんな比較をするだろうか。

—プラスティリナや粘土で作ったものを子どもたちの目に見えるところに1日中置いておいたらどうなるだろう。別の形に変えるだろうか。

—といった新たな疑問が浮かんできた。

このドキュメンテーションの特徴としてまず上げられるのは、子どもたちの活動の様子を観察し、その活動の意味を解説している点である。ドキュメンテーションは、子どもの活動の意味と価値を読み手に伝える効果的な方法である。ジョアンナが粘土にスプーンを押し当てたり、持ち上げたりする行為にどんな意味があるのか、ジャンが粘土をたたきつぶす写真とともに、「こうした素材とのかかわりは、アイスクリームを食べるごっこ遊びにもなるし、指や道具を使って感触を確かめる感覚的経験にもなる。色のイメージについて意見を交換し、共同作業をする機会にもなるのである」と解説が加えられている。

その後、子どもたちと粘土の関わりは発展し、見た目は異なる2種類の粘土（土粘土とプラスティリナ）の共通点を発見していく様子が記録されている。これを通して、ジョアンナとジャンの一見粘土をただ触る行為の中に、実は探索の意味と価値があることを読み手は知るのである。レジャ・アプローチにおいて子どもの知識はどのように獲得されるかについては、「私たちの知識は、行為から引き出され、行為にもとづく行為から引き出され、ついには内面の心理的操作つまり内面化された行為から引き出されます」（ガードナー、2011：

19) と語られている。

記録が単に成果を示す役割にとどまるのなら、子どもが制作した粘土の造形作品のみが示されるであろう。しかし、ドキュメンテーションでは、子どもの探求心と活動のプロセスを示す情報が提供されるのである。

さらにこのドキュメンテーションは、「われわれ教師側にも同様に…（中略）…といった新たな疑問が浮かんできた」と結ばれている。子どもたちをしっかりと見つけ、彼らの声に耳を傾けながら、保育者は子どもたちの活動を一段と発展させる道筋を模索している。保育者も、子どもたちと同様に、彼ら自身の思考やひらめきを探求しているのである。レジャにおいて、保育者は「パートナーとしての保育者たち」（ヘンドリック、2000：13）と言われるように、子どもたちの発見や経験を多様な角度から検討し、彼らのパートナーとして共に学びの過程に参加し協力することが求められている。しかも「われわれ教師側」という言葉から推測されるように、一人の保育者が単独に関与するのではない。子どもたちの活動を観察した後、複数の保育者が各自の観察結果を比較し合っ て検討し、子どもたちの探求と学びにおいて彼らに何を与えるべきか、どのように支えていくべきかを協議するのである。この協議は、ピーボディーテラス・チルドレンズセンターにおいては2～3人の保育者が一組となって行われる。

ドキュメンテーションは受け持ちのクラスの保育者ばかりでなく、他のクラスの保育者とも共有され、活動の振り返りやその後の活動の進行についても意見が交わされる。こうしてドキュメンテーションを絶え間なく綴ることは、子どもたちの活動に関する情報を収集し、さらに書かれた記録を基に他者との交流を継続することであり、ここに研究者集団としての保育者の姿を見ることができる。



見つけた。この新しい道具の発見により、再びスタジオ内の雰囲気が変わった。子どもたちは筆を観察するなかで、最適な握り方を考えていた。するとすぐに、教師は何も指示しなかったのにもかかわらず、子どもたちは完璧な使い方で筆と絵の具を使ってキャンパスに絵を描き始めた。

絵の具を使い切ると子どもたちは流しに向かった。すると今度は、水の性質を調べることに集中し始めた。

このドキュメンテーションの特徴は、言葉を発する前の子どもたちの思考や問題解決の様子を保育者が注意深く観察して記録している点である。これは、たとえ言葉を持たない乳児であっても、「すべての子どもたちは、最初から能動的で、生き生きとした心を持っている。経験に意味を見出したり、それを調べたり、他のものと関係づけたり、心配したり、環境に適応しようとする子どもの性質は生得的なものであり、適切な条件のもとで開花することができる」（ヘンドリック、2000：72）とのレッジョ・アプローチの信念に基づいている。すなわち、このドキュメンテーションは子どもを尊重する考え方に貫かれており、これを通して読み手は、保育者は子どもに対して多大な可能性を持つ存在としてまなざしを向けているのだと理解する。このドキュメンテーションは、親にも子どもを尊重することから始めようという「子ども理解」のメッセージを伝えることになる。

さらに、「教室内ではモノがどのように開いたり閉じたりするのかを調べている子どもたちがいた。そこで我々は絵の具の入った容器をふたが閉じたままにしておいた。すると我々の予測通り、子どもたちはふたの開け方を瞬時に解明した」という箇所から、保育者は乳児同士であっても互いに影響し合い、学び合う存在であると考え、子どもたちの共同の知恵を信じて活動を見守っていることが読み取れる。

子どもたちは多大な可能性を持っているという信念を基盤に、保育者は子どもに十分な配慮を与えるべきだとの考えが推察できる記録である。「今度は水の性質を調べることに集中し始めた」という一文から、子ども自身が好奇心を持った対象の意味を調べ、理解するために、保育者はどのように協力したらよいかを相談し始める姿が見えるようだ。

## おわりに

レジャ・アプローチの保育実践では、ドキュメンテーションは不可欠なものとなっている。しかし、その実例が示され解説される機会は我が国においては稀であった。今回、ピーボディーテラス・チルドレンズセンターの保育室に掲示される実例に触れ、その内容を検討することができた。ドキュメンテーションの作成は、以下の3つの観点に基づく。

1) 写真と文字を効果的に組み合わせて、子どもたちの思考を視覚化できるようにレイアウトする。子どもたちには、自分が過去に何をやりかけていたか、その時どう考えていたかを想起できる資料となる。また、同時に保育者間で子どもの意図や問題意識を確認し共有する媒体となる。

2) 結果報告としての記録でなく、子どもたちの探求活動の経過の記録である。すなわち、子どもたちの言葉と表情を詳述し、他者との関係性の中でどう発達するかを表現する。さらにその探求の中での保育者からの働きかけ方を記し、その後の活動の展開のためのアイデアも書き添える。

3) 保育者は、「子どもは教授される受け身的存在ではなく、経験に意味を見出し、他のものと関係つけて知識を構成していく存在である」との子ども観に立ち、それを基盤に観察し、記述する。すなわち、保育者は子どもを多大な可能性を持つ存在としてとらえ、彼らに尊敬のまなざしを向ける。

日本においても記録の重要性は語られ、それは個人または保育者集団の振り返りの源として保育能力の向上に貢献するものだとされてきた。その書き方

## レッジョ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討（伊東）

については諸説があるが、ピーボディーテラスが示す観点は重要な指針となり得るであろう。さらにそこでは、ドキュメンテーションは作成されればそれで終わりではなく、子どもの活動に対する親の関心を高めて保育参加を促す役割も担っていた。保育者のためには、ドキュメンテーションの書き方について先輩から後輩に指導する時間や、その内容に基づいて今後の教育方針を話し合う時間が確保されていた。ドキュメンテーションを用いて、子どもと保育者の交流、保育者間の交流、保育者と親と地域の人々との交流が図られることで、ドキュメンテーションは、それに基づいて保育を発展させる働きを持つことが再確認された。

このようなドキュメンテーションが可能になる背景には、子どもを取り巻くすべての人々に「子どもたちの一人ひとりが、大切な、かけがえのない一人の人間として、十分な尊敬と敬意を受けながら育まれています」（デルリオ、2011：13）という子ども観が存在するのである。

### 注

- 1) ポピンズ国際乳幼児教育研究所主催のハーバード大学乳幼児教育研修ツアーによる視察
- 2) プラスティリナ (Plastilina) は、着色され手に付着しにくく細かい作業が可能な油粘土である。
- 3) スカルプティング (sculpting) は、加熱可能なオープン粘土である。
- 4) モデリング (modeling) は、塑像用粘土である。

### 参考文献

- 木下龍太郎 (2000) 「レッジョ・エミリアその1 子どもの声と権利に根ざす保育」『現代と保育』50号、ひとなる書房、pp. 166-194.
- ヘンドリック, J. (著)、石垣恵美子・玉置哲淳 (訳) (2000) 『レッジョ・エミリア 保育実践入門』北大路書房
- 伊東久実 (2002) 「保問研の保育者による実践記録への着目」『季刊保育問題研究』196号、新読書社、pp.122-135.
- リナルディ, C. (著)、佐藤学・森眞理・塚田美紀 (訳) (2001) 「ドキュメンテーショ



レッジョ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討（伊東）

ンから構成されるカリキュラム」『子どもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、pp.169－189.

ガードナー、H.（著）、佐藤学（監修）（2011）「驚くべき学びの世界と知識の構成」『驚くべき学びの世界』ACCESS CO., LTD.、pp.18－21

デルリオ、G.（著）、（2011）「教育に力を注ぐ地域社会」『驚くべき学びの世界』ACCESS CO., LTD.、pp.11－15